



かつての 志木を語る その2

司会 原昭二氏（朝日屋原薬局三代当主）

話者1 井下田慶二郎氏（引又河岸回漕問屋十七代当主）

話者2 神山健吉氏（志木市文化財保護審議会会長）

〈この座談会は一九九三年に行われました〉

前回（その1）のあらまし

志木市は江戸時代からの歴史が詰まったまちです。前回は、町づくりに特に功績のあった方々の名前を挙げ、その活動振りをみてきました。中でも幕末最後の名主をつとめた星野半右衛門の活動は、志木市の歴史の重要な一ページをつくっています。その孫にあたるモトさんは、東京に出て小料理などを経営されたのですが、以下には、モトさんと会った神山さんの発言がつつきます。



神山 健吉氏

神山：「それが私共の店なのです」とモトさんが言っていました。戦争で小料理屋を止めて養鶏をやったり、精米をやったり、かなり大変だったらしいのです。息子さんが小さい時から劇団「東童」に入っていたのですが、三十年代の始め頃に劇団「民芸」に入って、それから俳優として活躍され、私も「円空」をテーマにした演劇を見に行ったことがあります。

モトさんがお住まいになっていた逗子に伺ったのが昭和四十八年の5月か6月で、初対面だったのですが、こういうことで志木から来ましたと説明すると、快く、いろいろなものを出してきて下さいます。それが、「星野半右衛門日記」や、「引又宿古絵図」でした。ビニール袋の中に入れてあり、のりがみみな剥がれていました。拝見しますと、大変貴重なものでした。それらを丸まった形のままで、貸して下さい

出てきましたので、「会所」について、もう少し詳しくお話しして戴けませんか。「会所」は何時頃から始まったのですか。照二さんが町長を勤められた頃には、「会所」はどうなっていたのですか。

神山：「会所」ができたのは、恐らく江戸時代からでしょうね。江戸時代には自治集会所的なものがあつて、この地区でも「会所」と呼ばれていました。司会：とすると星野家では、屋敷の裏に「会所」をもっていたのですか。

神山：いや、屋敷そのものが「会所」でした。名主をされていきましたから。そして名主を辞められてからも、いろいろな地区内のトラブルを仲裁し、解決されていたようです。たとえば現在の三上家と西山家のところに別の系統の三上さんというお宅があつて、その二軒の間の紛争なんかも解決されていたようです。発言力もあつたようです。恐らくそこが自治的な集会所のような機能を果たしていたんじゃないですかね。そのような事情で、星野家の屋敷を「会所」と呼んでいたようです。江戸時代からです。

司会：星野家に伝わる古地図を見ますと、御自分の家をもっと大きく描いています。これを「会所」そのものと考えてよいのでしょうか。

神山：そうですね。自宅が「会所」の役割を果たしていたのです。司会：では奥の方に「会所」を移してから、道路に面して警察署ができたというわけですね。

神山：いや、隠居所は、はじめからあつたと思いますが。表の方を譲渡して、自分たちは裏手の隠居所に住むようになったのではないのでしょうか。

司会：表が警察署になったとき、建物は立て替えられたのでしょうか。

神山：そうかもしれません。その辺はわかりませんが。司会：とにかく裏の隠居所の方へ会所

を移し、それから志木を離れて行くということですね。そのとき神山イトさんのお父さんが、その建物を譲り受けて、敷島神社の近くに移築して、その建物は残ったわけですね。

神山：もうその建物はなくなつたのですが。

司会：その場所は分かりますか。

神山：分かります。今接骨院がある辺りです。

司会：イトさんは、神山さんと血筋のつながりがある方ですか。

神山：わたくしの母親と従姉妹になるのです。

司会：弥次郎さんに会所を譲つてから、星野さん御家はすぐ東京に出られたのですか。

神山：照二さんが亡くなったので、家を処分され、若夫婦は、三十歳代で、もう東京に出てしまったのです。照二さんが亡くなつて間もなく、息子さんたちは出ていったんですね。

司会：照二さんが町長をしていた時の記録はあるんですか。

神山：志木市史の近代編の資料の中にちよつとだけ出てきますね。

司会：星野家については、「星野半右衛門」日記が発見されたことによつて、その詳細が分かつてきたわけですが、その日記を通して志木市史が充実したわけで、この日記を発見された神山さんの功績はきわめて大きいものがあると思います。

志木市史は、この日記によつて、明らかに、その厚みを増してきました。この



半右衛門日記

の日記の発見の経緯について、どこかにお書きになっていますか。

神山：ええ。志木市の市場の文集「いちば」の七号に書きました。今日はここに和正さんから貰った手紙をもつてきましたので、お目にかけましょう。この二通だけ手元に残っていました。それから、これが戸籍謄本です。こちらがワシさんのもので、こちらがモトさんのものです。

司会：この戸籍謄本は、現在は破棄されているのでしょうか。

神山：もう市役所にはありません。八十年経つと破棄されることになっていますから。たまたま「星野半右衛門日記」の中に折つたまま挟んであつたので、残つたのです。

司会：この戸籍謄本は志木市の歴史的な資料としては残されていないものですね。

神山：これは入っていません。これは当時の屋敷の公図、これがお隣の公図です。

司会：それでは、会所を、イトさんのお父さんの弥次郎さんが移されて、それからなくなつたわけですね。その後に警察署を移されたりした、その辺のことは、何か。

神山：聞いてないんです。というのは、モトさんにお会いしたのは、「回だけな」のです。5、6月にお会いして、もう8月に亡くなったので。

司会：いま屋敷神としてお不動さんがあるんですが、モトさんとお話してお不動さんが話題になりましたか。その話は出ましたか。

神山：そのお不動さんは、隠居所に行く道のわきにあつたようです。

司会：私が知っているのは、この星野さんの居住されていた土地を、私のお祖父さんが西武さんから借金して買い取つたんだと。借金は完済したことは間違いないようです。その前に警察

署があつたことですが、私が聞いているのは、そこに醍醐さんという竹屋さんがあつたんですね。東町に移転されて現在はホテルを経営されています。

神山：その後、お宅さんですか。

司会：いいえ、醍醐さんが表の半分ぐらい、また裏には鶏を飼育されていると、やさんがあつたんですね。うちの先祖がどうやって乗りこんだのかということは、詳しくは分からないのですが。

星野さんの系図の最後の方を伺いましたが、星野モトさんのお付き合いの中から、先程の貴重な資料を発掘され、その中には当時を偲ぶことのできる日記が含まれていたということは、文化的な意味が非常に大きいと思います。

古いことは知るよしもないのですが、このまちの核となつていた「市場」が、伊豆殿堀の消滅によつて事実上無くなつてしまつたのですよね。それに対して、市当局は駅前開発に非常に努力をされるようになってしまつた。

この機会に昔の話の中から、過去の何からヒントを得て、新しいまち作りの方向を見出したい。そのようなお話を聞きたいというのが、この座談会の趣旨なのです。このまちの歴史にお詳しい神山さんに話題を選んで戴いて、自由にお話しして戴きたいと思っています。

井下田家のお話しについても、今まで取り上げられていなかったエピソードを引き出して戴きたいのです。まず、井下田さん以外の人には知られていない取つて置きのお話しはありませんか。

例えば慶十郎さんについてとか、慶十郎さんの思い出というか・・・。（次号へ続く）

New Yorkの楽しみ方 その3



雪のニューヨーク、クイーンズから



エンパイアーステイトビルディング

日本の交通機関、とくに電車は、世界の人々が驚く程正確なスケジュールで運行しており、朝の通勤ラッシュ時、1分でも遅れようものなら大変な混乱を招きかねません。

しかし、冬真ただ中のニューヨーク、地下鉄は予告なしに、頻繁にストップします。原因は『雪』です。

24時間運行の地下鉄ですが、老朽化による故障や修復工事などで待てども待てども地下鉄が来ないことはよくあること。線や時間帯によつてだいたいの予想はつくものの、時刻表はありません。

地下鉄に乗っている間に、突然急行が各駅停車になったり、停まるはずの駅を通過する、なんてこともしばしば。

車内のアナウンスに集中してないと、目的地にたどり着けないこともありま

す。夏には耐えかねぬ程の熱さのホームに、見つけることがほぼ不可

能なトイレの数の少なさ。なぜかいつも『WET PAINT（＝ペンキ塗り立て）』の張り紙があるけれど修理はされない地下鉄構内。数少ないエレベーターはどれも悪臭が漂う――数え上げればきりが

ないほど、困ることが多いのがニューヨークの地下鉄です。

その、日本人から見ても「不便」な地下鉄ですが、ニューヨークにとつてどれだけ重要な役割を担っているかは計り知れません。車社会のアメリカにおいて、ここニューヨークほど自家用車を持たずに生活できる都市は他にありません。ニューヨーク市では地下鉄やバスの利用率が80%以

上へのぼりま

2000年のアメリカ国勢調査によると、16歳以上の労働者が通勤に使う交通手段は、自家用車が断トツで75・7%。バス、電車などの公共交通機関を使つて通勤する人は、わずか4・7%。その中でNY州は、24・4%の人がバスや電車を通勤手段としています。公共交通機関を使い通勤する人のおよそ3分の1がNY州の住民ということになります。

公共交通機関の利用の普及は、自家用車の減少につながります。実際に、ニューヨーク市のガソリン消費量は、1920年のアメリカの平均水準にとどまっているということです。

さて、そんな「不快適」だけど、「なくてはならない」ニューヨークの交通機関。その不便さゆえ、さぞかし皆いらつきながら利用しているだろう、と思いきや、実はここにニューヨークが見えてくるのです。

地下鉄を待つ間、プロ並みのパフォーマン스에目・耳を傾け、「なかなか来ないわね」と隣の人と世

話を

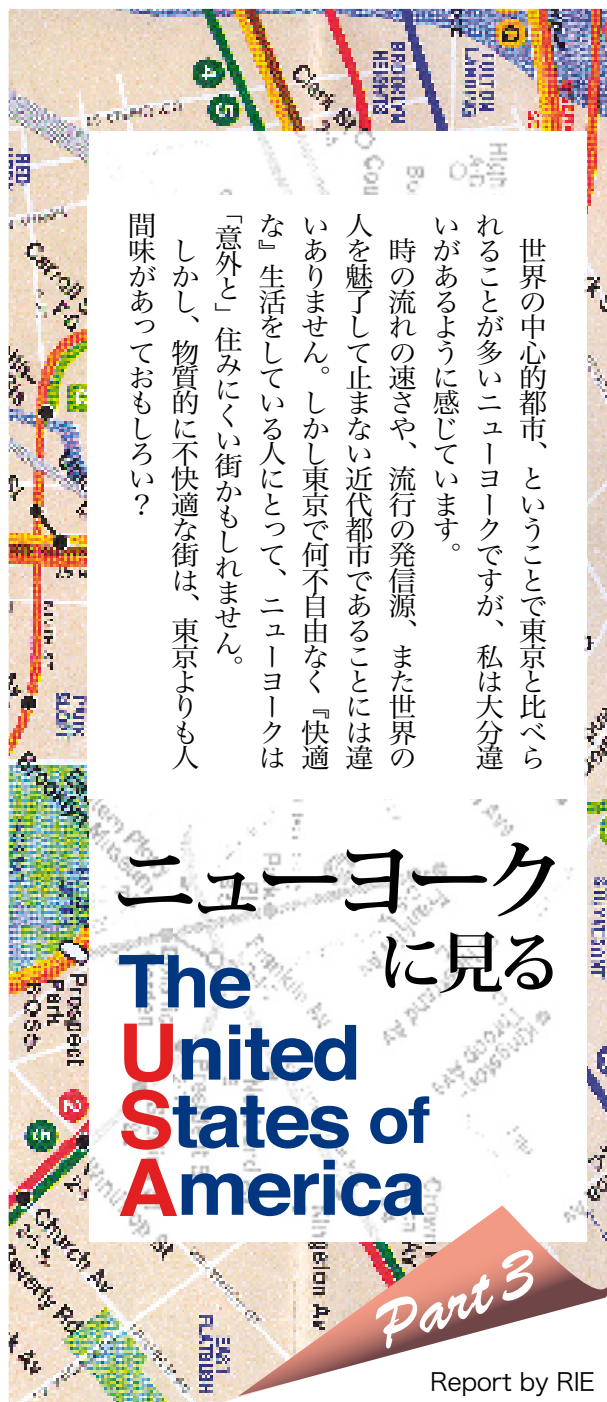
行く先がわからぬ地下鉄やバスでは乗客同士で確かめ合います。路線図を眺めている人がいれば「どこへ行きたいんだ？」と親切な人が教えてくれることでしょう。

皆仕事で疲れているのは東京と同じです。しかし醜い席とり合戦はほとんどありません。『優先席』でなくとも、席を譲り合うのも意外なニューヨークの常識。

街を歩けば人によつたり、嫌な顔をされる東京と比べ、ニューヨークでは必ず「Excuse me（すみません）」の言葉が聞こえます。

驚く方も多いと思いますが、東京ではめつたに見かけなくなつた人情味あふれる光景、ホスピタリティ精神が、ニューヨークの地下鉄・バス、日常生活にはあるのです。

ニューヨークを訪れたら、ぜひ地下鉄やバスに乗って、東京とはひと味もふた味も違う「生」のニューヨークを体験してみたいかがでしょうか？

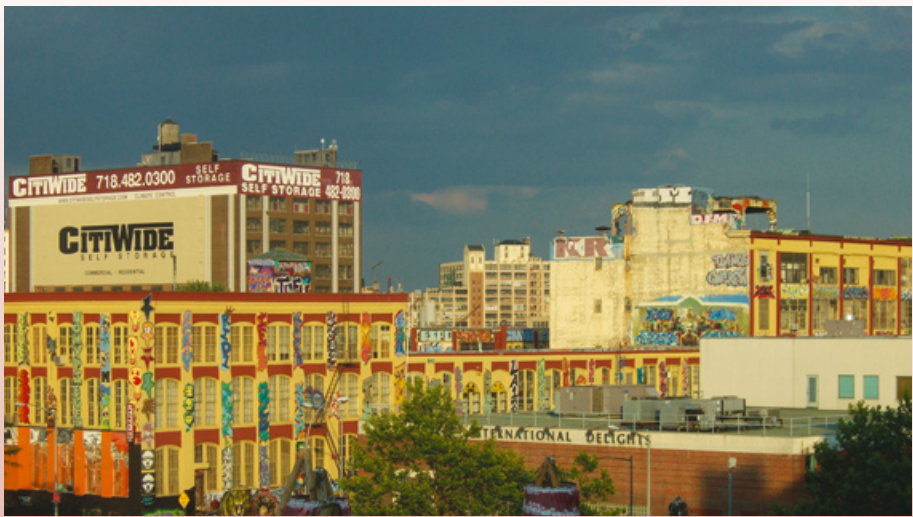


Report by RIE



フェリーから臨む自由の女神像

車窓から楽しむ、New York City



ニューヨーク市内をたつた2ドルで行き来できる地下鉄。マンハッタンからイーストリバーを越え、ブルックリンやクイーンズに入ると、地下鉄が地上に出て車内からマンハッタン景色が楽しめます。映画や写真で見えるビル群も一望できるのです。

一風変わったおすすめポイントは、マンハッタンからクイーンズを走る7番線の45th Rd./Courthouse Square駅付近（初回にご紹介した、PSI MOMAと同じ駅です）。タイムズスクエアやグランドセントラル駅からこの電車に乗り、クイーンズに入るとすぐに地上に出ます。マンハッタンのビル群を背に見えてくるのが、この奇妙な建物。グラフィティと呼ばれるアートが、建物全面に描かれています。地上に出ると同時に目に飛び込んでくるこの光景は圧巻です。

志木いろは市民大学 公開講座

「左右学のたのしみ」



昨年11月18日（日）、志木いろは市民大学の公開講座「左右学のたのしみ」がいろは遊学館ホールで開かれた。

第6回目この会では、左と右の不思議について、志木いろは市民大学学長の西山賢一氏の講義が行われた。

時計は右回り、地球の自転は左回り、右脳左脳に右利き左利き、ひな人形や結婚式での男女の

進み、遊離アミノ酸が増える。特にグルタミン酸が増加する。イノシン酸を含む量は、カツオそのものより、これを加工したカツオブシの方がはるかに高いのは、カツオブシをつくる過程で、イノシン酸が生成するからである。

採れたての魚、イキのいい魚を食べる食通は多いが、ハマチのイノシン酸は、死後急速に増加することが分かり、魚の種類にもよるが、生きじめした魚は寝かせた方がよいようだ。生き造りは「生きているだけでうまくない」というのは、イノシン酸が少ないためとも説明されている。鮮度が勝る、菌触りが良い、をとるか。この辺の論議はデリケートな世界になるようだ。

ところが魚介に対して肉類となると、畜殺後に熟成しても腐敗・変質していくので、長期間熟成してから食べるのが普通である。鶏肉は畜殺後、冷蔵庫で四〜八時間保存するとイノシン酸の含有量がピークとなり、豚肉は三日、牛肉は七〜一〇日後にもっとも多くなる。

このような熟成過程で、タンパク質分解酵素の作用で遊離ア

西山賢一
志木いろは市民大学学長
京都大学大学院理学研究科
博士課程修了理学博士、
埼玉大学経済学部教授を経て
上武大学経営情報学部教授
ホームページアドレス
www001.upp.so-net.ne.jp/niche



暮らしのヒント

味と香り

旨味

日本人が見付けた・・・

昆布のダシに興味をもつて、その成分を研究し、ダシのおいしさの成分は、グルタミン酸の塩であることを見出したのは、東京帝国大学の池田菊苗教授であった。明治四十一年（一九〇八）のことで、池田教授はこの物質のもつ独特の味を「うま味」と命名した。

その翌年、グルタミン酸は小麦のタンパク質を加水分解し、工業的に生産された。いまでは醸酵法で生産されている。一般に食べ物は中性なので、グルタミン酸は食品中で塩の形をとっている。

カツオブシとシイタケの旨味

コンブの旨味成分の発見から五年後の一九二三年、池田教授門下の小玉新太郎は、カツオブシの旨味成分はイノシン酸の塩であることを発見した。

それから半世紀、一九五七年になって、ヤマサ醤油の国中明

「味」のサイエンス・・・その三

博士は、グアニル酸の塩が旨味をもっていることを発見し、後になってこれがシイタケの旨味成分であることを明らかにした。

イノシン酸とグアニル酸は今、デンブンの醃漬、食用酵母から抽出する方法で生産され、市販品は、いずれもナトリウム塩である。

食品中の旨味成分についてグルタミン酸は、コンブ、チーズ、お茶、ノリ、イワシ、イカ、トマト、ジャガイモ、白菜などに含まれ、イノシン酸は、煮干し、カツオブシ、シラス干しなど干物の類に含まれ、またアジ、サシマ、タイなどの魚、エビ、カニなどの海産物のほか、豚肉、牛肉ほかの肉類に含まれている。グアニル酸は、シイタケ、マツタケ、エノキダケなどのキノコに普遍的に含まれる。

これらの旨味は食品の素材にもともと含まれているが、加工したり、熟成することによって増えてくる。例えばチーズは熟成によって乳タンパクの分解が

ミノ酸も増え、おまけに肉が柔らかくなることもおいしさに貢献している。

旨味成分を混ぜるとやわらかい・・・

旨味の成分、グアニル酸を遊離した酸を舐めてみた。旨味はあるが、そんなに強くはなかった。しかし比較のため、つぎにグルタミン酸を舐めた。たしかにグルタミン酸の方が旨味は強かった。ところが念のため、もう一度グアニル酸を舐めてみた。ものすごい旨味を感じた。グルタミン酸が口のなかに残っていたからである。これこそ「旨味の相乗作用」の発見であり、証明であった。

湯豆腐を食べるときの話しであるが、まずコンブでダシをとって、豆腐をカツオブシの入った醤油につける。旨味が出るのである。コンブを煮出したダシには、グルタミン酸はそれほど入っていない。カツオブシのダシにもイノシン酸はそんなに高い濃度で入っているわけではない。ところが、コンブ＋カツオブシ（または煮干し）のダシが昔から使われていた。理にかなっていたのだ。

地域情報

並び方の右と左、私たちの身の周りから宇宙まであふれている「右と左」。「左右学」とは聞き慣れない言葉だが、私たちの切っても切れないものである。

講師の西山氏は自身のホームページでもこの左右学についてわかり易く紹介しているので、この機会に右と左の不思議に触れてみては如何だろうか？

志木市市場町内会 「文集いちばより私の小学校時代 綱島安暉

前回（その二）

：私が小学校へ通い始めた頃は、まだ戦争の最中で、防空ズキンをかぶって通学していた・・・で始まった。

秋の運動会は、楽しい行事の一つだ。特に字別対抗リレーは運動会を盛り上げる花形レースの一つと数えられ、私も市場の代表選手として出場していた。市場はいつも優勢だった。

こうして、幼い日の事を思い出しながら書いているとあの日、あの頃の事がめまぐるしく、脳裏をかすめていく。戦争、敗戦、竹の子生活という時代を過しながらも、私達の頃は豊かな自然が沢山ありました。里山と称される場所も至る所に点在し、唱歌や、童謡に歌われる情景が真のあたりに広がっていた。

今、飽食の時代で、果物などは季節がまわらず一年中出廻っているが、私達の頃にはその時季しか味わえなかったが、そのために自然にたししみ四季のうつり変わりも十分味わう事が出来たのも、今思うと幸せな事だと思う。

それにくらべ、今の子ども達には便利な時代で、生まれ育つてはいるが、反面、自然は開発の波によって、うすらえ、公害とか、虐待、援交などという、世の中の歪みにさいなまれていく。「私は思う」子供達には豊かな自然の中で、思いきり走り廻れる環境をつくり出してもらえたらと、心から願うものである。

（つづきの二）

学校では学芸会や、音楽会も盛んに行われ、音楽会では「みかんの花咲く丘」や、「里の秋」がよく歌われる曲だったが、音楽会や他校の男の子が「うたをわすれたカナリヤ」の歌を独唱した事があった。とてもきれいな声で上手だった。今でもその曲を聞くと、その頃の事が鮮明に思いだされ、何ともいえないなつかしさを感じる。

私の組では、体操の時間の雨の日は、先生がよく本を読んでもくれた「母をたずねて三千里」など、先生が本を読み始めると、みんな静かになり途中で悲しい場面を聞くと女の子のすすり泣く声が聞こえてくる。授業の終わりのベルがなると教室の中に溜息がもれた。みんな目頭を赤くしていた。読み切れない時は次回になるが、それがまた楽しみだった。私達の頃は、今の子と違って「ボンバシク、アオバナチョウ、シジウタレバンチ、ススリ、ナメキチ」などといわれた程、二本バナをたらし、ナたらし小僧が多く、それをまた、すすたり、洋服でふくから袖のところがピカピカに光った服を着ている男の子が多かった。女の子はまた、「シラミ」がいるから

NPO市民フォーラムが編集するCREATIVEBOOK

第8号「首都圏人」



暮らしを楽しむ知的なヒントを与える「首都圏人」は1号から8号の刊行を以って第1期を完結します。

第1号から8号の刊行を以って第1期を完結します。

第1号 [ISBN4-8354-7204-7]
第2号 [ISBN4-8354-7205-5]
第3号 [ISBN4-8354-7213-6]
第4号 [ISBN4-8354-7214-4]
第5号 [ISBN4-8354-7217-9]
第6号 [ISBN978-4-8354-7227-0]
第7号 [ISBN978-4-8354-7228-7]

一般書店・楽天ブックス・amazonで第8号近刊 予約受付中

この人 長井長義 日本の薬学の創始者
文学に親しむ 國木田獨歩の「武蔵野」
特集 JR山手線の地誌
Bird's Eye 空撮 変貌する都市の景観
JR新宿駅付近 赤坂御用地・迎賓館 JR池袋付近
JR東横駅付近 JR西日暮里駅付近 JR王子駅付近
JR赤羽駅付近

季刊 B5版 100ページ(カラー 50ページ) 定価 630円(税込価格)

発行：(株) ヒューマン・クリエイティブ
〒113-0033 文京区本郷 5-9-5 TEL(03)3813-7937
FAX (048)476-9111 http://shutoken.camelianet.com/
発売：ブックینگ
〒101-0062 千代田区神田駿河台 2-8 TEL(03)3233-5336 (代表)

特定非営利活動法人NPO「市民フォーラム」

この法人は地域住民と行政に対して取材活動を行い、報道によって市民の公共参加を推進し、地域内のメディア事業を行って、市民のコミュニケーションを向上させることを目的としています。

地域情報紙「市民プレス」はNPO市民フォーラムが編集・発行し、無料で配付します。

※ ※ ※

◇ 読者の「オピニオン」(意見／考え)を募集します。

TEL 090(3048)5502

編集部 原宛にどうぞ